



『坂の上の雲』の主人公の3人は愛媛県松山市の出身。写真左から、日本海海戦出撃時の電報「天気晴朗ナレドモ波高シ」の名文で知られる秋山真之、その兄で陸軍大将となった秋山好古、近代俳句の祖といわれる正岡子規（国立国会図書館デジタルコレクション）。前ページは、瀬戸内海に面した松山市梅津寺（ばいしんじ）地区の丘に立つ、秋山兄弟の銅像。（撮影：武田直）

歴史学者として司馬作品を読んでいて、ほとほと感心させられるのは、なにより彼の文章にみられる事件の推移描写の筆力である。

たとえば、代表作『坂の上の雲』は、文庫本全八巻のうち、第四巻以降は延々と日露戦争の戦闘と戦術の描写である。本作の本来の構想では、司馬自身が語るように、同郷に育った秋山好古・真之兄弟と正岡子規という三人の人物の青春と、明治日本の成長を重ねあわせて描かれるはずだった。当時の陸軍・海軍・文壇をそれぞれ象徴する人物の交錯が丁寧に描かれれば、それはそれで別の意味で人間ドラマとして魅力的な作品となつたはずなのだが、残念ながら、この構想は最後まで貫かることはなかつた。主人公のひとり、子規は第三巻で早くも死去してしまひ、小説の後半部ではほとんど話題にもの

こうした脱線は本来は作品の価値を落としかねない叙述スタイルなのだが、司馬の場合、これが逆に作品の魅力となつた。読者は、これを読んで、まさにエンタメを楽しみながら「歴史の勉強」ができるわけで、ファンにとって、つねに司馬作品は読むと少し賢くなつた気になれる小説なのである。しかし、架空の物語を借りて、自身の思想や文明論を開陳し、しかもそれをあたかも史実を踏まえているかのように述べるのは、アンフェアな手法であり、考えてみれば、多くの歴史学者がこれに承服しないのは当然のことといえる。

とくに近年では、研究の進展とともに、坂本龍馬が明治維新に果たした役割が限定的であることや、斎藤道三が油売りではなかつたことなどが明らかになり、司馬作品が必ずしも史実を忠実に再現したものではないことは、あるていどの歴史好きには共通理解になつてしまつてゐる。そのため、最近では生半可な歴史好きが司馬作品受け売りの歴史知識を自慢げに披露して、逆にマニアから冷笑を浴びせられるという場面も、ネットやSNS上ではよく見かける。とはいへ、司馬遼太郎を論じるにあたつて、その作品の史実との距離や、歴史観についての吟味は、今後もきわめて重要な課題であり続ける



司馬遼太郎が描けなかった世界 清水克行（歴史家）

国民的作家と呼ばれた司馬遼太郎。熱烈なファンも多く、今もなおその作品は読み継がれている。しかし、その一方で現在では、いわゆる「司馬史観」が、さまざまな批判にさらされている。そもそも司馬作品とはいつてどのようなものなのか？ 司馬の描きたかったものはなにか？ 人気の歴史学者が読み解いていく。

司馬批判の数々

また、アカデミズムの側はアカデミズムの側で、昔から司馬の描く歴史像への評価は一貫して辛い。その原因のひとつは、フィクションであるはずの小説のなかに、絶妙に織り込まれる彼の歴史観や文明批評にある。極端な例として、高田屋嘉兵衛を描いた『菜の花の沖』などは、文庫本全六巻のうち第五巻は一冊ほぼすべてが江戸時代の日露関係の解説に費やされ、物語はまったく進まない。物語途中で作者の「余談」が唐突に始まるのは、小説としては変則であり、

没後二五年にして、なおその作品が読まれ続けている司馬遼太郎は、一方で「右」からも、「左」からも批判の多い作家である。逝去直後は「藤岡信勝氏をはじめとする「自由主義史観研究会」などの保守グループは、司馬の描く「明るい近代史」像を高く評価し、司馬を引き合いに出して、それまでの近代史研究・教育を「自虐史観」と攻撃していたはずなのだが、もはや時代がそれを追い越してしまつたのだろうか。現在では、むしろ保守の側ほど、司馬の近代史像（とくに昭和戦前期の評価）への風当たりが強いようと思われる。